〈俯瞰〉する『岷江入楚』

日本語日本文学科　**中井　賢一**

多く作品論者であり、時にテクスト論者である。表現事象そのものよりも、それが作品やテクストの全体像といかに関わるのか、常々注意するようにしている。いわば、〈俯瞰〉のための〈細部〉、それが私の理想とする方法である。

『岷江入楚』という源氏物語の注釈書がある。五十五巻にも及ぶそれは、当地熊本ゆかり細川幽斎と、その弟子中院通勝の、いわば共作であり、慶長三（1598）年に成った。『河海抄』『弄花抄』等の旧注はもちろん、通勝の聞書や私見も記される。他にも、「秘」の肩書で三条西公条の、「箋」で実枝の学説が引用され、また、「或抄」として『長珊聞書』も忠実に引かれている。そもそも長珊も公条の説を「御説」として引用しているから、つまり、『岷江入楚』は、公条、実枝の学説と、それに学んだ者たちの見解の集大成、いわば、時の三条西源氏学の到達点ということになる。

さて、この『岷江入楚』、随所に非常に興味深い注釈が施されている。

例えば、浮舟巻の冒頭。源氏物語の本文、それに対する『岷江入楚』の注、の順で掲げよう。なお、便宜上、記号と傍線を付す。

宮、なをかのほのかなりし夕べをおぼし忘るゝ世なし。

（浮舟巻一九〇頁）

※但し、引用の源氏物語本文及び頁数は『新大系』本による。底本は大島本で、それを欠く浮舟巻のみ明融本である。

①花匂宮の二条院の対にて浮舟君を見出給へる事也箋

②秘ほのかにかたらひし行末をおほす也箋

（第九巻三八六頁）

※但し、引用の岷江入楚本文及び頁数は『源氏物語古注釈叢刊』本（武蔵野書院）による。底本は三条西家本である。

匂宮は今なお浮舟と急接近した夜を忘れられずにいる、という。かつて、宇治中君を頼って上京してきた浮舟に、匂宮は二条院で言い寄った。それ以来、浮舟の面影を忘れられず、執心を続けているわけである。

如上の状況であるから、①については良い。過去の事実を指摘する『花鳥余情』を追認したということだろう。問題は②である。傍線を付した所、「行末」とある。つまり、匂宮が浮舟との「行末」、即ち未来について見据えている、

というのだ。しかし、本文を素直に辿る限り、この表現からは、匂宮の浮舟に対する過去の執心と今現在の執心しか読み取れないはずだろう。それ以上の情報は、直接的には無い。ところが、『岷江入楚』は、過去や今現在の「執心」によって展開するであろう未来までもを見透している。今現在までを映し出す表現を、未来の契機として捉えようとしているのだ。眼前の表現を、長期的な物語展開の中に位置付けようとする『岷江入楚』のスタンスが感じられはしないか。

あるいは、竹河巻冒頭の、語り手による前口上。次の**ゴシック体**部分に『岷江入楚』は注を施しているのであるが、考察の便宜上、その前後も少しく引用しておく。

これは、源氏の御族にも離れ給へりし、後の大殿わたりにありける悪御達の、落ちとまり残れるが、問はず語りしをきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「**源氏の御末〳〵に、ひが事どものまじりて**聞こゆるは、我よりも年の数つもり、ほけたりける人のひがことにや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。（竹河巻二五二頁）

③笺ひかことゝは花鳥に冷泉院のかくれたる御事　かほる源の実子にあらさる事　夕かほの上の事ゆへ玉かつらを息女のことく養育の事

④かくのことき事共ふる物語する人のあると也

⑤これ則薫の元来をふる事のかたり申せし宇治かくへきの序なり…（第九巻四一頁）

まず、竹河巻冒頭の大意を記しておこう。――この巻の内容は、光源氏方のご一族にも縁の薄かった、後の鬚黒太政大臣邸あたりに仕えた口さがない女房達で、生き残っていた者達が、問わず語りに伝えた物語は、光源氏方の語り伝える物語とは似もつかないが、その女房達が言ったことには、「**光源氏の御子孫について、間違ったことなどが混じって**伝わっているのは、私よりも年老いて、呆けていた人の言ったでたらめであろうか」などと不思議がっていたが、どちらが真実なのであろうか。――

これについて『岷江入楚』は、③「ひかこと」を、冷泉の真の血統が隠蔽されたこと、薫が光源氏の実子でないこと、光源氏は夕顔との過去ゆえに玉鬘を実子同様に養育したこと、と定義付けた上で、④それら事実を昔物語に語る人物の存在を指摘し、⑤それらが即ち薫の拠って来たるところを物語として語る宇治十帖を記すに相応しい「序」となっている、とまとめている。

③④は、①同様、『花鳥余情』の追認である。③につい

て、もとより鬚黒方の女房達が、冷泉や光源氏の秘事を知る由もないのだから、それら真相が、鬚黒方にとって「ひかこと」と捉えられるのは至極当然であって、それは良い。また、④について、そもそも光源氏方の女房が「真相」を読み手に提示することで、この物語が成立しているのだから、これも極めて当然の指摘であろう。私たちが注意すべきは、⑤の記述だ。『岷江入楚』は、竹河巻に「源氏の御末〻」の「ひが事ども」の存在が記されるのは、ここがこの後の宇治十帖の「序」だからである、と解しているのである。確かに、この後、「光源氏の実子でない」という「ひかこと」ゆえ、その「真相」から逃避するごとく、薫は宇治世界に身を投じる。薫に「ひかこと」があればこそ、宇治十帖の物語が展開しうる。その意味で、過去の「ひかこと」は、未来の宇治十帖の、確かに伏線として機能していることになる。ここもまた、『岷江入楚』は、「今現在までを映し出す表現を、未来の契機として捉えようとしている」わけだ。

思えば、『岷江入楚』は、早く藤裏葉巻について、驚くべき指摘をしていたのだった。この巻は、光源氏の准太上天皇就任・夕霧の結婚と中納言昇任・明石姫君の東宮入内などが描かれるため、古来「光源氏の栄華が極まる大団円の巻」とされてきた。最近でこそ異論もいくつか提出されているものの、鎌倉期以降、この「大団円」との見方は、いわば常識だったのである。

ところが、『岷江入楚』は、それを認めつつも、一方で、「世間の盛衰をありありとかきなせり」（第八巻二二四頁）とあるとおり、「盛」ばかりでなく「衰」をも見て取っている。無論、以降の物語展開を念頭にしての言辞なのであろう。しかし、少なくとも、藤裏葉巻の時点で、たたみかける「栄華」の描写が、来たる「衰」と表裏したものであること、いわば「衰」の伏線でもあることを指摘している点で、『岷江入楚』は、実に画期的であった。正しく「今現在までを映し出す表現を、未来の契機として捉えようとしている」ということである。

おそらく、そうなのだ。『岷江入楚』は、一貫して「眼前の表現を、長期的な物語展開の中に位置付けようとする」注釈書なのだ。いわば、源氏物語の表現の〈細部〉が、物語全体の中でいかに機能しているか〈俯瞰〉しようとする書なのである。

だとするなら、私は、この師弟のスタンスをこそ、「理想」とせねばなるまい。〈俯瞰〉のための〈細部〉であること、改めて肝に銘じたく思う次第である。